

◎水盤 ― 昭和十一年（一九三六）七月

本殿改築記念 入江太作

◎本殿 ―

72

猿庚申 ― 山鹿字正津ヶ浜

文化七年（一八一〇）

73

田屋跡 ― 山鹿字田屋

今は一面に畑になっているが、素焼土器の小さな破片が一面に散在している。

74

疫神社 ― 山鹿柏原バス停近く

◎猿田彦大神 ―

◎職立石柱 ― 安政三載（一八五六）正月

頭取 磯 吉 正右衛門 文匹郎

元右衛門 吉 平 茂 平 儀 八

弥右衛門 惣次郎 傳次郎 惣兵衛

吉兵衛 源三郎 芳 平 清兵衛

正三郎 半 三

◎石祠（疫神社） ― 昭和二十六年（一九五二）二月

祭神 素戔鳴男尊 柏原区再建

75

善福寺 ― 山鹿字柏原

河山入口阿弥陀ヶ池の碑の所にあったのだが、昭和三十一年

（一九五六）七月道路拡張のため、現在の場所に新築移転した。無量山と号し淨土宗鎮西派古刹光明寺末といわれている。本尊は阿弥陀如来（立像）寺内に阿弥陀堂がある。柏原区の大部分はこの寺の所領であつて、創立年代は貞治元年（一二六二）といわれている。

◎河 兼 緑 起 書（伝説）

寛永十七年（一六四〇）六月十五日の夜、山鹿柏原の浦人濱中伊右衛門は、うまやから牛をひき出そうとしていた一匹のカッパを見つけ、大手籠で打ち伏せ捕えようとしたら、急に胸苦しくなった。一心に善福寺の本尊阿弥陀如来を念じながらやっとカッパを捕えることができたので、うまやに縛り上げておいた。その夜、伊右衛門の夢枕にカッパがあらわれ、「われは多年河中にすむカッパである、一命を助けたまえば一つの功德を立て申さん」と言うので、伊右衛門は「善福寺の阿弥陀如来の前で浦人には一切害をしないと誓え」と申しわたした。カッパはすぐ「阿弥陀如来のいますかぎり、また氏神のみやまのあらんかぎり、氏子の一人にたいしても一切手出しはつかまつらず」という誓文を書いたので、伊右衛門はカッパをはなしてやった。伊右衛門はカッパの誓紙を善福寺にとどけて事の成り行きを話した。善福寺では誓文に縁起書を書きそえ、本堂の蓮台の下に納めた。この誓文を寛政元年（一七八九）善福寺の欽随という僧が取り出して写したら、たちまち両眼が失明したといふ伝えられている。その後弘化四年（一

八四七)に書きかえた河童縁起書が、現在善福寺に保存されている。善福寺の本尊阿弥陀仏は、もとの善福寺の近くにあった井戸(俗に阿弥陀ヶ池といふ)に沈められてあった仏像である。(吉屋町誌)

◎門 柱 ― 明治三二年(一八八九)十一月 武田源助

◎百度 石 ― 世話人中

◎瀬 中 伊 石 衛 門 の 墓 ― 明治十九年(一八八六)表に眞淨庵居士とある。伊右衛門は寛永十八年(一六四二)四月に没しているが、その墓も朽ちはたてたので山鹿村の里人達は伊右衛門のことを追憶し明治十九年(一八八六)にこの墓標を建立した。

和原浦馬鹿人 堀田 勘次郎 田中 幸平

田中 伊八 田中 兵作 井上 仁平

◎凍 盤 ― 明治八年(一八七五)三月

林 清三郎 中西 長平 渡多野善五郎

花田 文二郎 石橋 新兵衛

◎本 堂 ―

◎大師 堂 ―

大願寺所属であつたが、昭和十七年(一九四二)善福寺に移す。

鳥郷四国第五十七番札所

本尊 弘法大師

◎木 祠 ―

右側の坐像は立江地藏、左側の立像は延命地藏である。

堂山と和原浦の間は、昭和五十二年(一九七七)に埋め立て、現在は陸続きになっているが、その以前は橋が掛つていた。大正初期までは橋も無く孤島であつたので、堂山にある延命地藏にしかにはお参りが出来なかつた。堂山と海を隔てた和原浦の善福寺境内に、この身代り延命地藏を安置して里人はお参りをした。この延命地藏にお参りをするとお乳がよく出るようになるというので衆人の信仰をあつめている。

※この石段を上るとかなりの広さで、諸々の石造物が安置してある。こゝは昔より善福寺の飛び地境内で現在善福寺本堂のあるあたりに、小さな庵があり尼僧がこの庵のお守をしていた由、その尼僧達の墓が三休石段を上ると左側にある。

◎弘 法 大 師 坐 像 ― 文化五年(一八〇八)初安居日

金高山三角寺 豫州興院 小田彦蔵

◎八 十 八 休 の 仏 像 ―

◎生 目 八 幡 宮 ―

眼病の神として靈驗あらたかなのでお参りも数多い。

◎鳥 居 ― 大正九年(一九二〇)十月

田中 川原 悟 堀田 善平

若松市 吉部弥九郎 妻

この鳥居の柱前面に歌が刻み込まれているが、石が解けていて歌詞の判読が困難である。

照す生日の水かがみ

末の世までも 巖るざりけり

と詠まれている由、智印祐仙住職は語る。

◎石祠

◎修業大師像（弘法大師等身大立像）

行脚修業中の弘法大師像で足には草鞋をはいている。

（この広場の中央に）

◎五重層塔（一字一石寶塔）

明治十六年（一八八三）九月

発起 多賀谷 小作 中西 藤兵衛

林 清三郎 小田 彦七郎 平橋 利吉

石工 江崎才七善秋

山鹿柁原世話人 縄田 清三郎 重原 卯作

瓜生 藤三郎

発起 縄田 勘次郎 田中 勘助

佐野 傳次郎 亀津 利平

この五重層塔は禅寿寺の五重層塔に次ぐ立派なものである。

◎弘法大師坐像（南無大師遍照金剛）

文化元年（一八〇四）三月 柁原浦 妙海尼謹建

石工 赤間閑 本吉兵衛

（八十八体仏像の北側中間に）

◎阿弥陀如来坐像

文久□年九月 鐵手柳野面村 吉武清石之門

76

山鹿鉾害復旧之碑 山鹿字舟ヶ浦

昭和四十五年（一九七〇）五月 行炭鉾害事業同 外

昭和二十六年（一九五〇）日本炭鉾株式会社が大岩炭坑を引き

受け、同二十八年から採掘を開始したが、そのころ山鹿耕地

はすでに永年にわたる採掘のためひどい鉾害を受けていた。

鉾害のため山鹿の広い耕地には、大きな陥没湖が二ヶ所もで

きて、ほとんどの耕地はつぶれていた。この広大な湖水と化

した陥没農地を還元復旧することは容易でない問題であった。

特に陥没地の復旧作業工事は、遠賀川河口の平均標識よりも

著しく陥没度が低位にあった為、作業は困難をきわめたが、

遠賀川河床の砂を多量に陥没沈下箇所の下埋土に使用し、完

成をみる事ができた。山鹿耕地鉾害復旧工事に使用された

土は山鹿の城山一山を根こそぎに使った壁にひとしいと言わ

れている。この復旧完成した中で一〇ヘクタールは畑地とさ

れ、あとは田地として復旧している。原形復旧は六八ヘクタ

ールであった。（戸堅町誌）

77

大船堂 山鹿字舟ヶ浦

本尊 弘法大師

この下に深さ二メートル程の岩穴あり。室内より土器の類出

し事あり、乱世に人の隠れ住みし所と云云う、昔山鹿より若

松に至る街道こゝに在りし時の、里塚なりしと云う。

（遠賀郡誌）

福 岡 県 指 定 文 化 財 一 覧 表				
種 別	呼 称	指 定 年 月 日	所 在	所 有
有形民俗文化財	芦屋の空舟上人像附 関係資料	昭和三七・四・一九	芦屋 船頭町	安長寺
大然記念物	千光院の大蘇鉄	昭和三八・五・四	芦屋 船頭町	林田守邦
有形民俗文化財	千光院寺中町 関係資料	昭和三七・四・一九	芦屋 船頭町	廣濟神社
無形民俗文化財	八潮行事(節句)	昭和五一・四・二四	芦屋町 門	
有形民俗文化財	ひらた船(川端)	昭和三八・一・一六	芦屋 中ノ浜	芦屋町
有形民俗文化財	海雲寺の宝篋印塔	昭和三七・二・二〇	芦屋 中ノ浜	海雲寺
有形民俗文化財	金台寺時衆過去帳 附 近世文書	昭和五二・四・九	芦屋 西浜町	金台寺
書 跡	輪藏 附 経蔵	昭和三八・一・一六	山鹿 三軒屋	安楽寺
有形民俗文化財	銅製経筒	昭和三五・四・一二	山鹿 元町	法輪寺
考古資料	山鹿長塚	昭和五二・四・九	山鹿 柏原	
史跡	夏井ヶ浜の浜木綿自生群落	昭和三五・四・一二	山鹿 夏井ヶ浜	
無形民俗文化財	はねそ(盆踊り)	昭和五一・四・二四	芦屋町 門	
芦 屋 町 指 定 文 化 財 一 覧 表				
無形民俗文化財	簡湊神社の祇園太鼓	昭和五三・四・一	芦屋 船頭町	簡湊神社
考古資料	大塚古墳石室	昭和五三・四・一	芦屋 中ノ浜	
有形民俗文化財	金台寺の子安地蔵	昭和五三・四・一	芦屋 西浜町	金台寺
有形民俗文化財	堂山の石塔群(千体地蔵)	昭和五三・四・一	山鹿 柏原	

芦屋の建造物一覽表

呼 称	建 立 年 月	西 曆 逆 算	建 立 者	所 在	備 考	本 文 の 頁
鳥 居	元禄年中	七二五	長野太郎左衛門	芦屋船頭町	河湊神社	三〇
全	享保一〇・九	一五七	産徒中	山鹿柏原	狩尾神社	一三一
全	享保一一・一	二五六	産子中	山鹿元町	須賀神社(額面祇園社)	一二
全	寛延三・二	七五〇	村紐中	芦屋浜崎	恵比須神社	六四
全	文化四・九	一七五	中西喜平藏貞	山鹿柏原	狩尾神社	一三一
全	文化四・九	一七五	純田庄右衛門英道	山鹿柏原	狩尾神社	一三一
全	文化五・三	一七四	中西次郎平藏恒	芦屋正門町	神武天皇社	五三
全	文化五・三	一七四	越野三郎平藏久	山鹿雅木	築山天満宮(額面天満宮)	九〇
全	文化一〇・	一六九	魚町中	山鹿城山公園	白山神社(額面白山大神)	九二
全	文化一〇・九	一六九	魚町中	山鹿浦区	嚴島神社	一一九
全	文化一四・八	一六五	成屋作十郎正明	山鹿元町	須賀神社(額面祇園宮)	一一二
全	天保六・八	一四七	箇中又右衛門茂隆	山鹿中路	金台寺(額面熊野大権現)	七四
全	天保七・九	一四六	門前甚助	山鹿城山公園	白山神社	九二
全	大保一三・一	一四〇	魚町中	山鹿市場町	茂神社	六八
全	弘化三・六	一三八	桑原傳次郎宗昌外	山鹿浦区	鷺島神社(額面辨財天)	一九
全	弘化四・五	一三五	箇中又右衛門外	山鹿浦区	岩津神社	五五
全	嘉永二・一	一三三	桑原傳次郎外	山鹿浦区	岩津神社	五五
全	安政六・四	一二三	魚屋伝次郎外	山鹿浦区	地蔵神社(破損倒壊)	五七
全	安政六・四	一二三	魚屋伝次郎外	山鹿浦区	河湊神社(額面蛭子社)	三二
全	文久元・	一一一	太田源次郎道信	山鹿浦区		

[illegible]

呼称	鳥居	燈籠	建立年月	西暦	逆算	建立者	所在	備考	本文の頁
全	全	全	昭和九・六	一九三四	四八	東町区東友会	芦屋船頭町	稻荷神社(岡漢神社裏)	三一
全	全	全	昭和九・一〇	一九三四	四八	大君区中	山鹿大君	大君神社	九八
全	全	全	昭和一一・一	一九三五	四七	岡本文蔵 外	山鹿正津浜	濱松神社	一三五
全	全	全	昭和一一・一〇	一九四〇	四二	縄田高次郎 外	山鹿柏原	狩尾神社第二鳥居	一三一
全	全	全	安永八・五	一七七九	一〇三	柏原清 四郎左門	山鹿柏原	狩尾神社	一三三
全	全	全	天明丙午(六年)	一七八六	一九六	野口八良右衛門	山鹿柏原	狩尾神社	一三二
全	全	全	寛政三・九	七九一	一九一	ナワタや清吉	山鹿柏原	狩尾神社	一三一
全	全	全	寛政五・一	一七九三	一八九	中西良治	山鹿柏原	狩尾神社	一三二
全	全	全	寛政一一・七	一七九九	一八三	吉のや天神丸	芦屋浜崎	猪舂大明神	六九
全	全	全	天保二・一一	一八三一	一五一	中西善右五門 外	芦屋船頭町	岡漢神社(裏入口)	三〇
全	全	全	天保三・九	一八三一	一五〇	米屋定右五門 外	芦屋船頭町	岡漢神社	二八
全	全	全	天保四・二 再建	一八三三	一四九	小田定右衛門 外	芦屋船頭町	岡漢神社(西側入口)	三四
全	全	全	天保四・八	一八三九	一四三	伊万里焼商人 外	芦屋船頭町	岡漢神社	二八
全	全	全	天保五・六	一八四四	一三八	小田定右五門 外	山鹿元町	須賀神社	一三
全	全	全	弘化二・八	一八四五	一三七	小田彦五郎 外	山鹿元町	築山天満宮	九一
全	全	全	弘化三・一	一八四六	一三六	掛屋船乗組中	芦屋浜崎	恵比須神社	六四
全	全	全	弘化四・六	一八四七	一三五	米屋清左五門 外	芦屋船頭町	岡漢神社裏	三〇
全	全	全	弘化四・一一	一八四七	一三〇	横田貞右五門 外	芦屋白浜町	岩津神社	五五
全	全	全	安永二・五	一八四九	一三三	芦屋伊万里商人中	芦屋正門町	神武天皇社	五二
全	全	全	安永二・九	一八五五	一二七	多賀谷伊右衛門	山鹿柏原	狩尾神社	一三二
全	全	全	文久元・三	一八六一	一一一	小野清次郎茂廣	芦屋中ノ浜	安養寺	四六
全	全	全				小野清次郎	芦屋中ノ浜	安養寺(東側入口)	四六
全	全	全				小野清次郎	芦屋中ノ浜	安養寺	四六

燈籠										狛犬										藏立石柱									
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
明治一二・三	明治一四・六	明治一六・一二	明治二二・三	明治二四・五	明治四二・三	明治四三・一〇	寛政一二・五	字和一二・九	文化一二・九	天保六・四	弘化四・八	嘉永六・一	文久三・一	嘉永二・二	嘉永六・一	嘉永七・一一	安政三・一	安政五・九	萬延元・八	元治元・六	元治二・六	慶応二・							
一八七九	一八八一	一八八三	一八九九	一九〇一	一九〇九	一九一〇	一八〇〇	一八〇二	一八一六	一八三五	一八四七	一八五三	一八六三	一八四九	一八五三	一八五四	一八五六	一八五八	一八六〇	一八六四	一八六五	一八六六							
一〇三	一〇一	九九	八三	八一	七三	七二	一八二	一八〇	一六六	一四七	一三五	一二九	一九	一三三	一二九	一二八	二六	二四	二二	一八	一七	一六							
濱町中	江田傳七 外	吉永幸右衛門 外	佐野傳次郎長寿	江島徳太郎	江島徳太郎 外	中西又七	越野三郎平 外	白石空兵衛 外	我屋新七武清	多賀谷伊七	江田與平 外	紀伊國屋藤台衛門	中西善藏高崎儀助	孫兵衛 外	中西八右衛門 外	与七 外	正台衛門 外	若者中	錢屋銀次	村中若者連中	藤三良 外								
山鹿城山公園	芦屋中小路	芦屋市場町	山鹿柏原	芦屋白浜町	芦屋中小路	芦屋中小路	芦屋船頭町	山鹿柏原	山鹿柏原	山鹿元町	芦屋正門町	芦屋船頭町	芦屋白浜町	山鹿浦区	山鹿三軒屋	芦屋白浜町	山鹿柏原	山鹿正津浜	芦屋正門町	山鹿元町	山鹿浜崎	山鹿浦区							
秋葉神社	観音寺	光明寺	狩尾神社	白浜神社	金台寺	観音寺	岡妻神社	狩尾神社	狩尾神社	須賀神社	神武天皇社	岡妻神社	岩津神社	鐵島神社	城山神社	岩津神社	寝神社	溜松神社	神武天皇社	須賀神社	焚火神社	鐵島神社							
九三	六九	六六	三二	五七	七二	六九	二八	三二	三二	一三	五四	二八	五八	一九	〇一	五五	三六	三九	五三	一一	六三	一九							

呼 称	建立年月	西 暦	通 算	建 立 者	所 在	備 考	本 文 の 頁
藏立石柱	明治一〇・三	一八八七	九五	吉田磯吉 外	芦屋大城	妙見神社	一四
全	明治二〇・七	一八八七	九五	浜崎町年會	芦屋浜崎	稻荷神社(廣瀬神社裏)	三二
全	明治二二・七 再建	一八八九	九三	鶴原忠三 外	山鹿田屋	恵比須神社	六四
全	明治二七・三	一八九四	八八	塩田宗一 外	山鹿田屋	徳満神社	一三四
全	明治三〇・四	一八九七	八五	栗屋区	山鹿田屋	築山天満宮	九〇
全	明治三一・九	一八九八	八四	市場町	芦屋栗屋	貴船神社	一三
全	明治三四・六	一九〇一	八一		芦屋正門町	神武大皇社	五三
全	昭和九・一〇	一九三四	四八		山鹿大君	大君神社	九八
全	昭和二三・	一九二八	四四		芦屋船頭町	岡濤神社	二八
水 盤	延宝八・四	一六八〇	三〇二	太田雪兵衛	芦屋船頭町	岡濤神社(社務所前)	三〇
全	弘化二・一一	一八四五	一三七	横田儀四郎	芦屋中小路	観音寺	六九
全	安政二・初冬	一八五五	一二七		山鹿三軒屋	安楽寺	〇三
全	安政六・一	一八五九	一二三	江田興兵衛	芦屋市場町	光明寺	六六
全	文久二・五	一八六二	一二〇	忍藏 外	芦屋正門町	火切地藏堂	五八
全	慶応四・四	一八六八	一一四	本城触山	芦屋正門町	神武大皇社	五四
全	明治八・三	一八七五	一〇七	林清三郎 外	山鹿柏原	善福寺	一三七
全	明治一四・一	一八八一	一〇一	藤崎清市 外	山鹿城山公園	白山神社	九二
全	明治一〇・七	一八八七	九五	小敷村貞懸 平	山鹿万町	大瀬寺	一〇四
全	明治一一・一	一八八八	九四	江崎才七	山鹿松原	狩尾神社	一三二
全	明治二二・	一八九五	八七	原田三七富野久八	芦屋中ノ浜	安養寺	四六
全	明治二八・九	一八九五	八七	大庭寿壯福原卯助	芦屋浜口	恵美須神社	一六
全	明治三二・六	一九〇八	八四	坂尾甚次郎 外	山鹿雁木	築山天満宮	九・

水		門		柱		盤	
全	全	全	全	全	全	全	全
明治三一・一	明治三一・七	明治三四・一	明治三〇・	大正四・六	大正五・六	大正一・二	大正一・八
明治二・四	明治二・四	昭和七・三	昭和七・七	昭和七・七	昭和八・四	昭和一一・七	昭和一一・九
昭和四二・	明治一〇・初秋	明治二一・五	明治三一・一一	明治三四・六	明治三五・九		
一八九八	一九〇〇	一九〇一		一九一五	一九一六	一九二二	一九二二
一九二七	一九二八	一九三二	一九三二	一九三二	一九三三	一九三六	一九三六
一九三九	一九六七	一八七七	一八八八	一八九八	一九〇〇	一九〇二	
八四	八二	八一		六七	六六	六〇	六〇
五五	五四	五〇	五〇	五〇	四九	四六	四六
四三	一五	一〇五	九四	八四	八一	八〇	
多賀谷伊三郎 外	吉永幸右衛門 外	吉永朽之助 外	濱中又兵衛 外	守田仙太郎	熊野貞十 外	安高福蔵	守田仙太郎
入江太作	巳卯年生還暦記念	横田幸次横田貞吾		中西藤兵衛 外	永田喜五郎	武田源助	吉田徳蔵
多賀谷伊三郎 外	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿船頭町	山鹿元町	芦屋船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋
山鹿中ノ浜	山鹿松原	山鹿船頭町	山鹿柏原	山鹿大君	山鹿大城	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜	山鹿雁木	山鹿船頭町	山鹿白浜町	山鹿三軒屋	山鹿栗屋
山鹿柏原	山鹿濱崎	山鹿正津浜					

呼 称	建 立 年 月	西 暦	逆 算	建 立 者	所 在	備 考	本 文 の 頁
門 柱	明治四一・八 明治四四・五 大正三・三 大正五・六 大正五・一 大正九・八 大正一二・ 大正一二・二	一九〇八 一九一一 一九一四 一九一六 一九一六 一九二〇 一九二三 一九二三	七四 七一 六八 六八 六六 六六 五九 五九	船頭町大師講社中 井取太郎 外 吉永惣次郎 江嶋徳太郎 福原卯助 田中賢一郎 外 縄田佐平	芦屋船頭町 芦屋中ノ浜 芦屋中小路 山鹿元町 芦屋浜口 山鹿元町 芦屋浜崎	禅拜寺 観音寺 法輪寺 金台寺 大師堂 観音堂 閻魔堂	三八 四九 六九 一〇八 七一 一六 一〇五 六三
玉 垣	天保五・二 天保七・一 嘉永三・	一八三四 一八三六 一八五〇	一四八 一四六 一三二	旧玉垣(移設) 中西善藏 外 桑原伝次郎 外 小田伊平 外 小田彦十郎 外	芦屋船頭町 芦屋船頭町 芦屋市場町 山鹿雅木 山鹿元町	岡漢神社 岡漢神社 戌神社 蛭子神社 須賀神社	三三 三〇 六八 九六 一一
石 段	明治三五・八 明治四〇・六 明治四三・ 大正一二・五 昭和一二・ 天保一二・六 明治一二・三 明治三三・一〇	一九〇二 一九〇七 一九一〇 一九一二 一九三八 一八四一 一八七九 一九〇〇	八〇 七五 七二 五九 四四 一四一 一〇三 八二	野間兵七 外 浜之町中 塩田利七 外 粟屋区中 桑原新次郎 木田伊六 外 田中勘助	山鹿雅木 山鹿雅木 山鹿城山公蔵 山鹿白浜町 芦屋粟屋 芦屋中小路 芦屋粟屋 山鹿柏原	築山天満宮 築山天満宮 秋葉神社 岩津神社 貫船神社 観音寺(本堂石段) 地蔵堂 登尾神社(社前)	九〇 九〇 九三 五四 一三 六九 一三 一三二

[illegible]

呼 称	建 立 年 月	西 暦	逆 算	建 立 者	所 在	備 考	本 文 の 頁
潮 井 行	昭和七・七	一九三二	五〇	久野むつの外	山鹿 柏原	栗嶋神社	二八
全	昭和八・五	一九三三	四九		芦屋 浜崎	恵比須神社	六四
全	昭和一二・一	一九二七	四五		芦屋 船頭町	岡湊神社	三〇
全	昭和一二・一	一九三九	四三		芦屋 船頭町	岡湊神社	三〇
石 祠	文政二・一	一八一九	一六三	熊鷹神社(須賀神社本殿左側左端の石祠)	山鹿 元町	須賀神社	一四
全	文政二・一	一八二七	一五五	和川吉右衛門	芦屋 大城	妙見神社	一五
全	天保四・九 再建	一八三三	一四九	林貞蔵 外	芦屋 船頭町	恵比須神社(岡湊神社裏)	三一
全	天保四・〇	一八三九	一四三	桑原伝次郎源徳	芦屋 浜崎	金比羅宮(恵比須神社右側)	六四
全	嘉永三・四 再建	一八五〇	一二二		芦屋 浜口	恵美須神社	一六
全	文久昔載冬 再建	一八六一	一一一	芦屋村中	芦屋 大城	妙見神社	一五
全	文久三・二	一八六三	一一九	小田彦五郎 外	山鹿 城山公園	白山神社	九四
全	明治一二・四 再建	一八七九	〇三	魚町中	山鹿 城山公園	稻荷神社	九四
全	明治二二・九	一八九〇	九二	塩田久次郎	芦屋 白浜町	地蔵神社	五七
全	明治三〇・八	一八九七	八五		芦屋 栗屋	地蔵堂	一三
全	明治三〇・一二	一八九七	八五	渡多野定七 外	山鹿 元町	麻生神社	一一
全	明治三五・一	一九〇二	八〇	高崎儀之助	山鹿 元町	金毘羅神社	一六
全	明治三五・九	一九〇二	八〇		芦屋 船頭町	禪寿寺の裏	三六
全	大正八・一〇	一九一九	六三	小田伊平	山鹿 大君	大君神社	九八
全	大正一〇・九	一九二一	六一	柏原区	山鹿 雁木	築山天満宮	九〇
全	大正一二・六	一九二三	五九	中ノ沼中	芦屋 船頭町	河山入口左側 岡湊神社裏	二五 三二

石祠	昭和七・六	一九三二	五〇	井上龍助 外	山鹿浦区	住吉神社(嚴島神社境内)	一一〇
全	昭和九・六 再建	一九三四	四八	杉本信太郎 外	山鹿船頭町	稻荷神社(池邊神社裏)	三一
全	昭和六・一・一	一九四一	四一	野口喜之松 外	山鹿雁木	疫神社	九六
全	昭和二六・二 再建	一九五一	三・	柏原区	山鹿柏原	疫神社	一三六
全				鯨澤出土地(イゴの神)	山鹿田屋	重岡重俊氏宅	三五
百 度 石	大保 四・六	一八三三	一四九	若松屋善九郎 外	山鹿船頭町	廣瀨神社	二八
全	天保一四・六	一八四三	一三九	米屋又右衛門 外	山鹿元町	須賀神社	一一一
全	明治二五・五	一九〇二	八〇	世話人中	山鹿白浜町	白浜神社	五八
全					山鹿柏原	善福寺	一三七
庚申尊天	寛保一・九	一七四二	二四〇	魚町商人中	山鹿三軒屋	城山神社	一〇一
猿田彦大神	天明元・九	一七八一	二〇一	当浦中	山鹿浦区	嚴島神社	二二〇
全	天明三・一	一七八三	一九九		山鹿元町	秋葉神社	〇六
全	天明八・	一七八八	一九四		山鹿元町	須賀神社	一一
全	寛政二・晩冬	一七九〇	一九二		山鹿浜口	惠美須神社	一六
庚申尊天	寛政六・二	一七九四	一八八		山鹿浜崎	猪脊大明神	六五
猿田彦命	寛政一・五	一七九九	一八三		山鹿雁木	築山天満宮	九〇
猿田彦太神	寛政一・七	一七九九	一八三		山鹿船頭町	大銀杏の木の下	二二
猿庚申	文化七・	一八〇〇	一七二		山鹿正津浜	前田松夫氏宅	一三六
猿田彦大神	文政二・三	一八〇九	一六三	上町中	山鹿船頭町	岡邊神社裏	三二
全	文政五・四	一八二二	一六〇		山鹿船頭町	岡邊神社(市面金剛)	三四
全	文政五・四	一八二二	一六〇		山鹿三軒屋	城山神社	一〇一
全	文政二・三	一八二九	一五三	小川作十郎	山鹿元町	須賀神社	一一五

呼 称	建 立 年 月	西 暦	逆 算	建 立 者	所 在	備 考	本 文 の 頁
猿田彦大神	天保一五・一 安政 六・一	一八四四 一八五九	一三八 一二三	萬町中	山鹿 万町 山鹿 浜崎 山鹿 柏原 山鹿 田屋 山鹿 栗屋 芦屋 大城 芦屋 幸町 山鹿 元町	萬千代神社 志比須神社 疫神社 徳満神社 上りバス停西側 妙見神社 火切地蔵堂前 須賀神社	一〇五 六四 一三六 一三四 一四 一五 五九 一一二
全	(判読不明)			幸町中	山鹿 元町 山鹿 柏原 山鹿 中ノ路 山鹿 元町 山鹿 中ノ浜 芦屋 中ノ浜 芦屋 中ノ浜 山鹿 元町	法輪寺 洞山(堂口) 金台寺 法輪寺 法輪寺文化センターの裏 芦屋町文化センターの裏	一一〇 二六 七三 一〇八 四三 四二
五輪塔と石仏	芦屋で最も古いと伝えられている露群						
堂山の石塔群	平氏戦没者の供養塔と伝えられる						
森生氏の墓群							
漢字五輪の塔	貞享四・一〇	一八八七	二九五				
宝 塔	昭和三二・発掘	一九五七	二五				
山鹿城跡中世火葬墓石塔		一九七七	五	昭和五二・発掘			
宝篋印塔	千寿御前の墓と称されている						
全	寛永 二・二	一六二五	三五七	秋枝止兵衛 外	山鹿 元町 山鹿 浦元	法輪寺 薬師堂	一〇九 一六
全	享和 三・春	一八〇二	一七九	泉指定民俗文化財	芦屋 中ノ浜	海雲寺	四七
全	文政 元・七	一八一八	一六四	和出吉右衛門 外	芦屋 船頭町	禅寿寺	三六
全	文政 八・春	一八二五	一五七	万根七兵衛七十歳賀	芦屋 市場町	光明寺裏墓地	六七
全	天保 二・八	一八三一	一五	和田伊八	芦屋 市場町	光明寺	六六
全	天保 九・七	一八三八	一四四	浜中又右衛門茂群	山鹿 元町	法輪寺	一〇八

呼 称	建 立 年 月	西 暦	逆 算	建 立 者	所 在	備 考	本文 の頁
五重塔 全	天保二・四 明治一六・九	一八三一 一八八三	一五一 九九	戸屋商人二十一名 多賀谷小作 外	戸屋船頭町 山鹿柏原	禪寿寺 善福寺	三五 一三八
三界万靈一石合路	文化九・七	一八一二	一七〇	太田喜兵衛演貞	戸屋船頭町	禪寿寺	三六
三界万靈	天保一一・	一八四〇	一四二	安高平六浮信	戸屋中ノ浜	横町ノ地藏堂	六一
一字一石大乘妙典	宝曆四・七	一七五四	二二八	芳永幸重郎 外	戸屋市場町	光明寺	四六
大乘妙典一字一石	宝曆四・九	一七五四	二二八	太田序六同人妻	戸屋船頭町	禪寿寺	六七
大乘妙典一字一石	寛政一〇・二	一七九八	一八四		戸屋船頭町	安長寺	二五
一字一石	天保八・一	一八三五	一四七	刀根七兵衛恭通	戸屋市場町	光明寺裏墓地	六七
大乘妙典一字一石	弘化二・五	一八四五	一三七	中西善藏	戸屋幸町	光明寺裏墓地	五九
一字一石大乘妙典	明治一三・二	一八八〇	一〇二	吉永市良助	戸屋市場町	光明寺	六七
御國中二十二番	天保六・二	一八三五	一四七		戸屋中小路	観音寺	六九
國中廿二番机所	明治二四・九	一八九一	九一	梅崎善六 表友	戸屋中小路	観音寺	六九
四國第七十四番甲山寺	明治二五・一〇	一八九二	九〇		山鹿浦区	聚師堂	一六
御國六十二番机所	明治三三・八	一九〇〇	八二		戸屋船頭町	禪寿寺	三五
阿弥陀如来坐像	文久□・九	一八八〇		吉武清右卫門	山鹿柏原	善福寺	一三八
慈羅蘇閣尊者坐像	明治四三・	一九一〇	七二	畑野善右卫門 外	山鹿元町	法輪寺裏山	一一〇
大聖文殊菩薩坐像	昭和二・五	一九二七	五五	波多野龍雄 外	山鹿元町	法輪寺裏山	一一〇
大行普賢菩薩坐像	昭和三・一一	一九二八	五四	小田福次 外	山鹿元町	法輪寺裏山	一一一
日光大師坐像					戸屋市場町	光明寺	六六
法然上人七百五十年大遷忌記念碑		一九六〇	二二	(昭和三五・四)	戸屋市場町	光明寺	六六
親鸞上人立像(銅製)	昭和四九・三	一九七四	八	本堂庫裡改修記念	戸屋中ノ浜	安養寺	四六

呼 称	建 立 年 月	西 曆	逆 算	建 立 者	所 在	備 考	本文 の頁
波切不動明王 毘沙門天王	大正二・二・八	一九二三	五九	古田磯吉 外	芦屋浜崎	關慶堂	六四
不動明王立像				外芳太郎	山鹿柏原	洞山(堂山)	二二六
南無阿彌陀佛	天保五・六	一八三四	一四八	当浦中	芦屋浜崎	浜崎海岸	六三
全	慶応四・三	一八六八	一一四	森正平同妻	芦屋浜口	大師堂	一六
南無大師遍照金剛	明治三三・八	一九〇〇	八二	西國須排講社中	芦屋船頭町	禪壽寺	三六
南無妙法蓮華經	明治三四・二	一九〇一	八一	堀江定次郎 外	山鹿浦区	堀江正行氏宅	一一〇
弘法大師坐像	文化元・三	一八〇四	一七八	妙海尼	山鹿柏原	善福寺	一三八
全	文化五・	一八〇八	一七四	小田彦藏	山鹿柏原	善福寺	三七
全	文政一・一	一八二八	一五四		芦屋船頭町	禪壽寺	三六
全	明治二〇・六	一八八七	九五	大庭寿三江藤助七	芦屋浜口	大師堂	一九
弘法大師立像	大正一〇・三	一九二一	六一		芦屋中ノ浜	海雲寺	四八
全	大正一二・三	一九二三	五九		高屋浜崎	閻魔堂	六三
弘法大師坐像	昭和八・九	一九三三	四九		芦屋中ノ浜	海雲寺	四八
弘法大師立像	昭和九・一	一九三四	四八	堀江幸太郎 外	山鹿元町	観音堂	一〇六
全	昭和一二・一二	一九三七	四五	黒山力オル十三年忌	芦屋正門町	浜の地藏堂	五〇
修業大師立像					山鹿柏原	善福寺	三八
子安観世音菩薩	大正三・一〇	一九一四	六八	百姓町中	山鹿元町	観音堂	一〇五
延命地藏尊坐像	大正一三・七	一九二四	五八	野中利太郎 外	山鹿元町	法輪寺裏山	一〇
奉行地藏大菩薩立像	昭和七・五	一九三二	五〇	大竹孝助	芦屋中ノ路	観音寺	六九
立江地藏立像					芦屋浜崎	浜崎海岸	六三
南無善女龍王の碑					芦屋船頭町	安長寺	二五

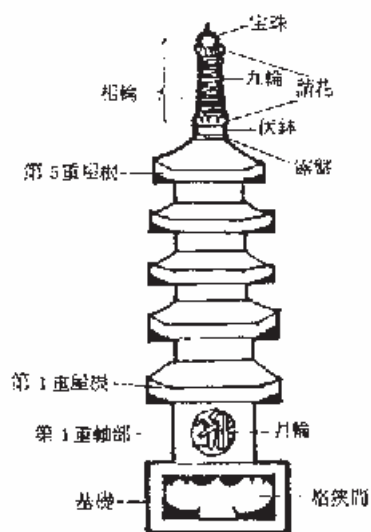
佛像	元禄 六・七	一六九三	二八九	日高四郎	芦屋 船頭町	安長寺	二五
佛像(地藏尊)	安政 六・七	一八五九	二二三	坂口平四郎江田與平	芦屋 市湯町	光明寺	六七
佛像(二〇二体)	明治二一	一八八八	九四	大森孝三	芦屋 浜口	大徳堂	一九
佛像(三十三体)				上田房吉 外	芦屋 市湯町	光明寺	六四
佛像(三十三体)				黒山カヲル	山鹿 元町	法輪寺 裏山	一一〇
佛像(八十八体)					山鹿 柏原	善福寺	一三七
佛像(三十二体)					芦屋 正門町	浜の地藏堂	五〇
佛像(約百体)					芦屋 中ノ浜	海雲寺	四八
十三仏	大正 二	一九一三	六九	波多野忠藏	山鹿 元町	観音堂	一〇六
十三仏	大正二二・八	一九二三	五九	吉田磯吉 外	芦屋 浜崎	閻魔堂	六四
神饌幣帛供進神社	大正 九・一〇	一九二〇	六二	田中新 外	山鹿 柏原	鈴屋神社	一一一
幣帛料の碑	昭和 九・三	一九三四	四八	建武中興六百年記念会	芦屋 大城	妙見神社	一五
大國主大神	明治 八・七	一八八五	九七	桑原伝次郎	芦屋 白浜町	大黒社	五〇
夜泣神	明治三二・一	一八九九	八三	本社通夜連中	芦屋 船頭町	國邊神社裏	三二
御神璽の碑	明治四〇・八	一九〇七	七五	小田彦五郎 外	芦屋 白浜町	白浜神社	五八
大神宮の碑	弘化 四・春	一八四七	一二五		山鹿 元町	須賀神社	一一四
役行者の碑	宝暦 九・一	一七五九	二二五	野中久次 外	山鹿 元町	須賀神社	一一四
大黒立像	文政 二・一一	一八一九	一六三	掛屋兼組中	芦屋 浜崎	恵比須神社	六四
全	文政 四・九	一八一	一六	成屋勇八 外	山鹿 元町	須賀神社	一四
全	大正 四・五	一九一五	六七	市湯町内中	芦屋 市湯町	戎神社	六八
全	大正 三・七	一九一四	六八	小田伊平 外	山鹿 柏原	狩尾神社裏	一三二
牛の石像				小田伊平 外	山鹿 雁木	築山天満宮	九一

呼 称	建 立 年 月	西 暦	換 算	建 立 者	所 在	備 考	本 文 の 頁
羊の石像	昭和六・	一九三一	五一	明治四十年生還記念	芦屋船頭町	岡渡神社	三〇
稲荷石像	昭和七・九	一九三二	五〇	岸原佐太郎 外	芦屋白浜町	白浜神社	五七
筑前芦屋釜護像	昭和五〇・三	一九七五	七	還暦記念	芦屋船頭町	岡渡神社	三〇
六部塚	元禄一・三・	一七〇〇	二八二	当浦中	山鹿柏原	柏原道石側	一一三
漁夫遭難者供養塔	天明四・八	一七八四	一九八		山鹿浦区	薬師堂	一一六
法華塔	明治一八・六	一八八五	九七	芦屋町先賢顕彰会	芦屋幸町	日蓮宗芦屋教会所	七〇
常陸丸殉難勇士之碑	昭和二八・四	一九五三	二九	黒山立橋 外	芦屋中小路	浜崎海岸	六一
吉田保警部補殉職之地	昭和二三・三	一九五八	二四	芦屋町	芦屋浜口	金台寺墓地	七二
合戦巨戦没武士合葬墓	昭和三七・一	一九六二	二〇	建設期成会	芦屋船頭町	鶴松墓苑	一九
戦没者慰霊塔	昭和五〇・八	一九七五	七	三軒屋上組	山鹿三軒屋	中央公園	三七
平家供養塔						城山庵	〇二
千七百廿祭の碑	明治三五・秋	一九〇二	八〇	長野新三郎 外	芦屋船頭町	岡渡神社	二八
三好徳松報恩記念碑	明治四〇・八	一九〇七	七五	三好徳松	山鹿万町	大願寺	一〇四
日露戦没記念の碑	明治四一・五	一九〇八	七四	本出國太郎 外	山鹿柏原	狩尾神社	一三二
神殿改築記念碑	大正六・五	一九一七	六五	鶴原鶴松 外	山鹿柏原	狩尾神社	一三三
県社神武天皇社の碑	大正一〇・七	一九二一	六一	松浦藤右衛門 外	芦屋正門町	神武天皇社	五三
県道開通記念碑	昭和八・四	一九三三	四九	小田利三郎 外	山鹿柏原	柏原道石側	一一四
改築記念植樹の碑	昭和一二・五	一九三七	四五	三村俊造	山鹿元町	須賀神社	一一四
神武天皇聖蹟廣水門顕彰碑	昭和一五・	一九四〇	四二	紀元二千六百年奉祝会	芦屋正門町	神武天皇社	五三
維持会創設碑	昭和一七・一	一九四二	四〇		山鹿万町	大願寺	一〇四
一千五十年祭記念植樹の碑	昭和二六・	一九五一	三一	稚木区	山鹿稚木	築山天満宮	九〇

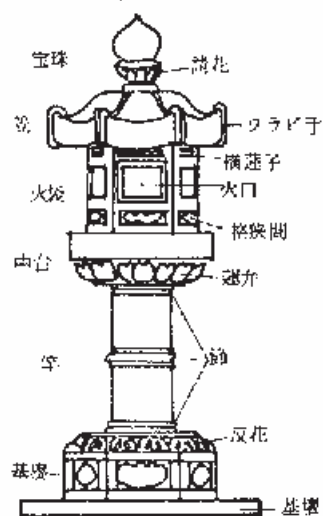
相原漁業協同組合 記念碑	昭和三八・三	一九六三	一九	相原漁業協同組合 安高陣兵衛	山鹿 柏原	河山(堂山)	一二五
山鹿鋳害復旧之碑	昭和四五・五	一九七〇	五	石炭鋳害事業團	山鹿 業屋	(昭和四二・二)	一二三
耕地整理顕彰碑	昭和四七・三	一九七二	二		山鹿 角ヶ浦		一三八
卓錫泉の碑	宝曆一三・一一	一七八三	一〇	秋枝勘次郎廣利	山鹿 中ノ浜	慈屋中学校運動場西側隅	四九
トモ綱石	安永 四・九	一八五九	一九	業屋「」	山鹿 元町	観音堂	一〇五
経蔵碑	安永 五・八	一八五八	一三一	倉野義寿	山鹿 中小路	富田医院の前下る	七五
備米蔵の碑	萬延 元・九	一八六〇	一二四	江藤興五郎信照	山鹿 三軒屋	安樂寺	一〇三
道しるべ石	文久 元・	一八六一	一二二		山鹿 金屋町	外山光輝氏宅前	七八
惣本山知恩院直末表碑	天保 六・九	一八三九	一二一		山鹿 幸町	火切地藏堂	五八
旅順白土山表忠塔模型	大正 三・七	一九一四	一四七	秋枝八郎廣温	山鹿 万町	大願寺	一〇五
旧芦屋橋の石標	大正 六・四	一九一七	六八	阪田孫右衛門	山鹿 柏原	狩尾神社	一三二
全	大正 六・四	一九一七	六五		山鹿 遠賀信用金庫芦屋出張所の裏		四四
山鹿兵隊次秀遠之城跡	大正 一一・九	一九二二	六〇	芦屋町立小学校職員児童	山鹿 雁木	芦屋コットハーバー前	九二
岡縣主祖熊鷹宅跡	昭和 六・四	一九三一	五一	吉田三郎	山鹿 雁木	城山公園	九四
下関要塞第二区地帯標	昭和 一〇・二	一九三五	四七	下関要塞司令部	山鹿 元町	須賀神社	一一三
厚厚の碑	昭和 一三・一〇	一九三八	四四	門主御巡教記念	山鹿 柏原	洞山	一二七
かなやの松の碑				西本願寺門主御銘	山鹿 中ノ浜	安養寺	四六
山鹿城址の碑	昭和 四一・三	一九六六	一六		山鹿 中ノ浜	安養寺	四六
鹿門養舎の碑	昭和 四八・三	一九七二	九	縄手屋鶴原吉平	山鹿 雁木	城山公園	九四
恩故知新の碑	昭和 五〇・一	一九七五	七		山鹿 元町	山鹿小学校	一一〇
奉寄進の碑	天保 七・六	一八三六	一四六	堀江政右エ門 外	山鹿 元町	山鹿小学校	一一一
					山鹿 元町	須賀神社	一四

呼 称	建 立 年 月	西 暦	逆 算	建 立 者	所 在	備 考	本 文 の 頁
山田有成功表碑	明治四四・一〇	一九一一	七一	有志卒業生	芦屋白浜町	芦屋小学校	五四
石川君紀功碑	明治四四・三	一九一一	七一	芦屋町民	芦屋船頭町	中央公園	三七
石川町長五十年祭之碑	昭和三七・四	一九六二	二〇	芦屋町先賢顕彰会	芦屋船頭町	中央公園	三七
縣生友七碑	明治四二・三	一九〇九	七三	榎原直次郎 外	山鹿元町	御廟所墓地	一〇六
稻永久四郎基正之碑	明治四二・一〇	一九〇九	七三	門人中	山鹿元町	觀音堂	一〇五
小川又之助之碑	大正二・一一	一九一三	六九	力若幸右エ門 外	山鹿元町	御廟所墓地	一〇六
中西米吉之碑	大正一一・四	一九二二	六〇	重岡諒市 外	山鹿元町	御廟所墓地	一〇六
三浦忠平之碑	昭和六・八	一九三一	五〇	折尾土木管区職員	芦屋中小路	金台寺墓地	七五
刀根牛吉之碑	昭和一一・三	一九四〇	四二	吉田徳藏 外	芦屋中小路	金台寺墓地	七五
長野政八翁の立像	昭和二九・三	一九五四	二八	建設委員会	芦屋中ノ浜		四四
芭蕉翁葛蒲塚	寛政五・	一七九三	一八九	古永松卜太田希王	芦屋船頭町	禅寿寺	三六
石渡の句碑	文化三・二	一八〇六	一七六	不知榮	芦屋船頭町	禅寿寺	三六
千々和由太の句碑	明治二・	一八六九	一一三	若松区松川より移設	芦屋市場町	光明寺	六六
芭蕉の句碑(花本人神)	明治二五・一〇	一八九二	九〇	竹亭野山 外	芦屋白浜町	地蔵神社境内	五八
小野警一郎の句碑	昭和一〇・八	一九二五	四七	鶴頭陣社門人一同	芦屋船頭町	岡邊神社	三〇
石井翠女の句碑	昭和三四・七	一九五九	二三	堀江ユキノ	山鹿万町	大願寺	一〇四
秋田光清の歌碑	昭和三七・三	一九六二	二〇	歌碑建設有志一同	山鹿雁木	城山公園	九三
万葉の歌碑	昭和四四・五	一九六九	一三	芦屋町	山鹿	魚見公園	一二二
野見山朱鳥の句碑	昭和四五・八	一九七〇	一二	浜木綿俳句会	山鹿	魚見公園	一二三
山鹿小学校歌の碑の恵	昭和五一・三	一九七六	六	藤本眞平	山鹿	山鹿小学校	一一一
藤本春秋子の句碑	昭和五三・四	一九七八	四	浜木綿俳句会	山鹿	魚見公園	一二三

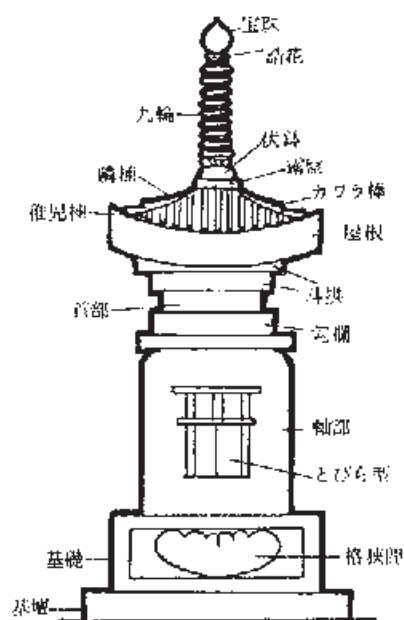
[illegible]



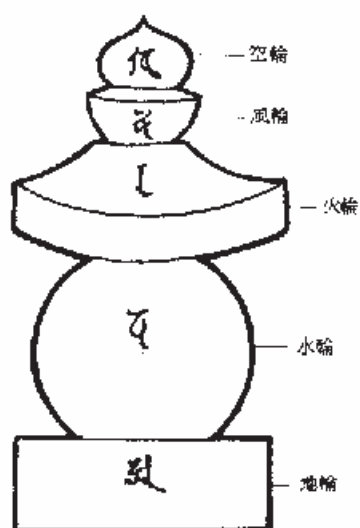
層 塔



灯 籠



宝 塔



五 輪 塔

明治～大正初期の苅屋



川俣が二艘 西川を上っている。砥川橋には松が
生えていた。砥川川の向うは猪熊あたり。

砥園崎橋と砥園崎波止＝本文21頁参照



第一階段を上ると左と右に石垣その道の道があった。
校舎の左側に金屋の天蔵宮があった。

苅屋高等小学校＝本文 78 頁参照

明治一大正初夏の芦屋

渡し船は芦屋側より山鹿の渡し場に向っている。
中央に見える煙突はコークス工場の煙突である。



山鹿城跡と渡し船＝本文 94 頁参照

遠景に芦屋、右側に山鹿城跡が見える。左側の河川に堤防がある。その向うが鶴ヶ浜である。明治までは芦屋内であった。



鶴ヶ浜の汐干狩

明治一大正初期の芦屋



大願寺と多西谷家・浜中家の白壁土蔵造りが見える。
山鹿城跡の両側に遠賀川の水面が見える。

法輪寺上より望む山鹿一本文108頁参照



狩尾宮は石の山上に祀つてある。山鹿の里人は家の
神棚に奉げる御酬井をこゝの浜辺に取りに来ていた。

狩尾宮第三鳥居と千疊敷＝本文 131 頁・133 頁参照

大正六―七年頃の芦屋

この川は西川。左は祇園崎の波止、橋を右に行くと芦屋の町。



祇園崎橋―本文21頁参照

右に見える建物は社務所である。この神宮である黒山殿行はこの社務所で寺子屋を開いていた。



神武天皇社―本文51頁参照

大正六・七年頃の芦屋



幸田より大城・粟屋に通じる道で両側は松の防風林である。左側に神武宮の石燈籠が見える。

鈴の松原＝本文52頁石燈籠参照



芦屋橋つき当り高台に芦屋尋常小学校、その右に安養寺又右に芦屋高等小学校が見える。

旧芦屋橋＝本文44頁参照

大正末期～昭和初期の芦屋

風景は前者と変わらないが、これには山鹿側に電柱が二本建っている。



旧芦屋橋＝本文44頁参照

山鹿城跡の本丸に家が見える。これは行楽客に菓子や飲物またビールや酒等を売るばやホテルがあった。左側の登山道には電柱が建って街道もついていた。



山鹿城跡＝本文 94 頁参照

大正末期－昭和初期の芦屋



遠景は芦屋。波懸けの岸には弁慶岩や太鼓岩も見られる。戦後コンクリートで遊歩道が出来たので今では波懸けの景観は見られない。

浪懸けの岸＝本文 118 頁参照



堂山には延命地藏堂と蛭子神社が見える。大正六年に初めて出来た制山橋が見える。

柏原の堂山＝本文 126 頁参照

堂山側よりの町並。前方は昭原浦。
中央の坂のある家は乾野屋。



洞山橋

水族館は堂山と洞山の間にあった。洞初には十軒
ほど牛魚料理の店があった。右は洞山館。側奥は
新三館、中手時角にある小屋は海産物店。



洞山の水族館

大正末期－昭和初期の芦屋



洞山の洞穴が見える。左に見るように生魚料理の店が大小十軒ほどこの周辺にあった。

洞山と生魚料理の店



狩尾岬より望んだ洞山全景で左が延命地藏堂がある堂山で右が洞穴のある洞山である。

洞山全景

江川の川さへス

筑盤で採れる石炭や大羽炭坑で採れる石炭は、この江川を利用して河津より洞瀬崎方面に、川船により運搬輸送していた。江川は周辺より流れ込む泥土や礫・木のため川底が浅くなり、川船の通行に支障をきたすので一年に一度江川を利用する船頭衆により江川の川さへをするしきになりになっている。写真で見えるように、多くの川船と船頭衆が繰出で、江川の清津川さへに勢を出している。



この写真は旧江川橋あたりより三貳三坑あたりを望んで写ったものである。中央の煙突下の建物は汽船場、その右に建物は三坑の巻揚、その右の大きな建物は変電所である。

この八枚の図は小川健次郎氏の木版画。失なわれた
昔の風景を、記憶をたどりながら板にしたもので線
34畫、構図畫の大きさが多色刷りである。

観音寺本堂の屋根で眺みをきかせていた栗豆（今は無い）



鳥居の三重松原には白飯稻荷があり、また多くの狐
が生息していた。大雪の降る夜中に狐行（きこぎょう）といつて
各町内より、油揚げにぎりめし、煮しめ等を竹の皮
に包み持って行き、狐（稻荷大黒神）を供養する行事
が大正初期までつづいていた。



寒 風 行

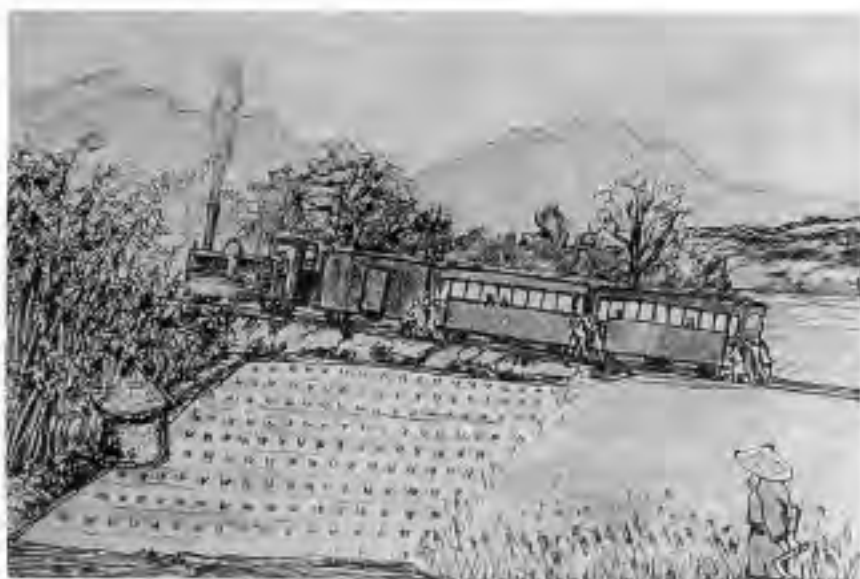
芦屋の砂丘に四〇メートル程の窪みがあった。此所は四五度ぐういの急斜面をなして、子供たちが転がり落ちて遊ぶよき遊場であった。



芦屋の姫ヶたんぼ



今に残る商家—本文 75 頁参照



芦屋より遠賀川までの芦屋鉄道
上り坂になると男性は降りてあとおしをしていた



御手洗池（本文 175 頁参照）



法輪寺の法篋印塔と石仏＝本文 110 頁参照

織を立てゝいるのが御座船、後はお供船や遊船、丁前に浮んでいる一般は下関かよいの胴船である。当日は花火大会も催される。



筑山天満宮の船御幸＝本文 89 頁参照

この話は、故岩崎天外先生が昭和二十七年六月「戸屋昔話」と題して、座談会の折にお話になられたことを瀬戸新聞の当主正留氏が録音テープにとられたものである。

岩崎天外先生はこのお話の冒頭に次のように云われている。「私の話は文献や公証があるというわけではなし、伝説に頼って話を申しあげます。伝説でやるときまずと、その間にお手洗池のこととがあるいは戸軒長老のこととか、専門に一つの場所を調べて見ようかという人が出てくるかも知れません。その折りに確実な証拠があるでしょう。その呼び出しに私はすべて伝説によってお話を申しあげます。」

②天狗の切り松というのは、今は飛行場の中になっております。幸町から薬屋に通じる松原に、彌田の宮跡がありました。神武天皇が一年四ヶ月間ご滞在になった所で、いわゆる昔が原ともいわれています。その間田の宮跡から二丁程行きますと、田の藪という所がありまして、国道の側に二まちはかりの田圃がありました。安高という家が一軒ありましたが、そこを古賀坂松榮寺と申しました。その前に大きな松がありました。これを天狗の切り松と申しました。大人が二人でだきまわす程の松で一の枝をスツと切り落しその枝を乗せてあります。ここにも切り口があり、ここにも切り口があります。(切り落した松を一直線状に互に重ね合わせた状態で両切り口の様)そしてシゲシゲと茂った立

派な松でした。昔の人は天狗様が切って乗せたのだと言いついていました。

③なお彌田の宮跡ですが、その天狗の切り松から幸町に向って二丁程の所にありました。その場所は普通の松とちがって、地山の松と申しまして谷にいう女松がいつぱい茂っておりまして。神武天皇がご滞在になられたという場所でございます。私共が小学生の頃には、そこから種々の石片、敷石の破れ(破片)などが出土しておりました。そこが神武天皇ご滞在の場所だと言いついておられます。昔はそこを高倉様ともいわれていました。高倉様といえは、彌田に高倉神社がございますが、後に今の高倉へ移られたものと考えられます。と申しますのは高倉神社のお祭りには、必ず戸屋の浪崎の人達が参加しなければ御興は動かなかつたものです。昔の宮口は「戸せき宮口」と申しまして、浪崎中の家が戸を閉めて総出で高倉様に参拝したものです。底井野から遠賀川の川西の地域の名は皆、高倉様の氏子ですから、戸屋から今の高倉へ移られたものではないかと考えられます。

④お手洗池は幸町と高倉様の中頃に、白浜稻荷様がありました。(今は白浜町に移設)そこから西北へ二丁程の所の松山の中に百四十五〇坪もあったでしょうが、なかなか立派な池でございました。浅い池で年中泉水が湧き出ていまし

て、洗濯によくきく水でした。昔は戸屋じゅうから洗濯物を担いで行ったもので、水に二時間浸しておくとだけできれいになり、まことに不思議な池でした。午前中に洗濯に已向き洗濯をして洗濯物が乾く間に持つて行った弁当をひろげ食べながら雑談にふけり乾くのを待つていたとの事。またお茶の水にも大変よい水で、天氣の好い日には茶道具を持つていつて一口茶の湯を楽しんだものです。

御手洗池はその昔、神武天皇、神功皇后がみそぎをなさったところです。それが御手洗池の名のはじまりです。

又此処には御手洗池の主と言つて大きな亀が住んでいました。古者の話によると、昔は千丈の亀があつて豊かな水があふれていたそうですが今はあとかたもありません。

⑤大城・大塚の古蹟について、大城は戸屋の本村といひまして戸屋の発祥の地であります。永い永い年月を得て今日の戸屋が出来あがつたのであります。大城からは古いものが出上したそうですが、大塚の古蹟もその一つです。どの様な方の古蹟であるかは私は知りません。

⑥つぎに戸軒長者の住居跡ですが、此処は浜口から大城に行く途中で（現在レース場の東北側の低い丘）戸軒長者の住居跡があります。あの跡地からは非常に多くの出土品が出土しましたが、戸屋小学校にその一部が保管してあります。戸軒長者の玄關側の門櫓の木の柱に、こんな歌が書いてつるしてあつたと言ひ伝えられています。「朝日輝く夕日輝く生ておいたら千貫目」

⑦つぎに祇園橋の松原・猪熊渡し・東祇園橋・西祇園橋について私（大外先生）が小学校の教員をしていました頃は、まだ祇園橋には一軒の家もない美しい松原でした。よく生徒を連れて遊びに来たものです。今は全く面影もありません。今の祇園橋は西祇園橋と言つていました。この橋を渡つて上手をこえると猪熊渡しがありました。大変便所でした。そして今の八木モーターズの附近に東祇園橋があり祇園橋は当時は川の中にある島でした。こちらから眺める風景は一帯の絵の如くでした。

⑧戸屋歸馬場のことですが、今から六十数年前（昭和二十七年）にこの話をされた。に東町の松井敏さん方の方々の止門町から高浜町・帯に広い競馬場がありまして仲々盛んでした。又東町には遊樂が凸軒ありました。東の方から東屋・えびす丸・梅善・三蔵屋と立派なものがありました。

⑨つぎに鶴ヶ浜、別名月の海について、城山の東側の一落川幅の広い所を鶴ヶ浜又は月の海と申しますが、月の海は万葉集に歌つてあります。月夜に金波銀波の美しさは昔も今も人の心をとらえます。鶴ヶ浜の出来もその昔には多くの鶴が飛来していたものでしょう。

⑩寺中町についてですが、今の安長寺から東を寺中町と言つていました。寺中町は空也上人の弟子達がいついた役者の町で東町・帯のことです。大変氣位が高くは屋敷者の誇を

もっていました。そのためか寺中町の者は他町内のもと結婚する様なことが少なかつた様です。芦屋役者には今でいうファンが多数いたようです。

③千光院についてですが、此処には日本三大懸鉄の一つがありまして今日も繁っています。又江戸末期から明治にかけて有名な歌人梅窓吐翁という方がいました。林田守治さんのおぢいさんです。

④浜口八十八ヶ所の事です。戦前浜口と上の浜の途中にちよつと坂道になつた所に浜口八十八ヶ所がありお参りが多かつたですが今はどこに移つたのでしょうか、私(天外先生)は方々を尋ね歩きましたが、未だに行方が判りません。御存知の方は教えて下さい。

⑤つぎに禅寿寺についてですが、此処には有名な火よけの達磨がありました。今は無い様ですね。それと毎年三月の御大匠様はそれは大変賑やかなお祭りで近郷近任から善男善女が集つて岡養宮の境内まで見せ物・屋台等で一杯でした。今日お大師様の復活が望まれますがなんだか遠い昔の懐かしい思い出となりました。

⑥松蔭亭についてですが、之は禅寿寺の裏山に古増屋のおじいさんが庵をつくつたもので、ちよつと茶屋風の風流なものでした。宗像先生が江戸から帰省のたびにこの松蔭亭でよく遊ばれたそうで多くの歌が残っていました。戦火で焼失しました。おいしい事をしました。

⑦つぎに古松軒について、古松軒は私(天外先生)の御であります洞山先生の住宅で(今の町民会館駐車場附近)その呼名です。廻りをミカン畑に囲まれた静かなお宅でした。

⑧合戦跡について(今の中学校・町民会館・中央公園・舊の松原の砂丘地帯)いつの頃のどの様な人の戦があつたか知りませんが、確かに合戦があつた事はまちがいないでしょう。昔から合戦の跡と言ひ伝えられています。あの丘の頂上に六つ程の戦死者の墓がありました。どこに移したのかはうぼうさがしたかわかりません。その他にも一つ大きな墓がありました。伊勢の大輔さんの墓といわれています。立派な墓でした。今はどこに移されたのでしょうか、おいしい事をしました。

⑨安養寺の紅梅
まあ九州から中国にかけて、これほど大きな紅梅はありませんでした。とにかく珍らしく大きな立派なものでした。今はその跡になの実が植てあります。

⑩金屋の天満宮
戸畑の天満寺から芦屋に來られて滞在された場所で、大変出緒のあるお宮です。その時に一玄海の波はさもなくぞ人心はけしけれ」と歌を残されています。旧八月二十三日旅情を慰めるために、里人たちが舟遊ふなあそびをしておなぐさめした。それが舟御幸のはじまりです。同じ日に花火大会が催されるようになりました。

◎旧町立病院

金屋天満宮と海雲寺の横小学校との間にありました。

◎海雲寺

昔は今の場所より北よりにありました。海雲寺の坂を寺坂といつとりました。海雲寺の五重の塔（宝篋印塔のこと）は有名な豪潮律師の建てたものです。また雲慶作の仁王像もあり、東久世の宮筆の額がありましたよ。大きな掛物で釈迦の涅槃がありました、狩野雪信の書いたものでした。

◎芦屋釜の跡

局長（元芦屋郵便局長吉永光雄氏）さんの家の附近、地下三尺位の所にゴ石が敷きつめてあり、ゴ石の溝が川端に向つて造られ、金灰や油壺などが出土しました。芦屋釜の跡と思われまふ。信用組合（金屋公民館の所）、森病院、福田の一角を昔の人は釜屋町と云っていたそうです。

◎垂間野の橋

新玉支店横の橋そ道から山鹿にかゝっていた橋でした。金台寺を垂間野の道場といっていました。支那から船にかくれて逃げて来た有名な八尾の狐（金毛丸尾の狐）が垂間野の橋からあがって、奥州那須野ヶ原であはれまわったという有名な橋です。

◎金台寺（時宗）

子安腹母大菩薩様があります。源頼朝の母が清水寺に参り子の授かるよう祈念した。夢まくらに観音菩薩が立たれ、この地藏尊を授けられた。黄金の仏像を肉蔵した大きな仏

◎観音寺のカンカン石について

昔カンカン石の宗平さんという智慧者がいまして、長崎で黒船が沈んでなかなかこの船を揚げることが出来ず困っていた時に、私がその船を揚げましようとして申し込んで、何百何千の樽を寄せあつめてこゝろみましたが、大失敗して長崎を坊主姿で夜逃げして来る途中、ある村で百姓達が樽の木の所でワイワイ騒いでいる所を通りあわせて、何事かとのぞいて見ると、石を鋤や鉄でコツコツたゝいている、妙な音がするので騒いでいるのである。宗平さんバットひらめき金もうけになると思い、「ヤーヤーお百姓その石を粗末にすると疫病がはやるから止めなさい、そっとしておきなさい、私が供養してしんぜよう」と妙なお経をとねえてお百姓達を解散させ、自分でその石をひろいあげて、京都に行き三條公にお目通りして、石に従五位という位をもらつて宗平さんは烏帽子・直垂を袴こみ、芦屋に帰えて来て大変な騒ぎになったと云う。その石が観音寺の境内に今もあります。面白い人だったそうです。のちに提燈屋をはじめて、注文の品を半年も一年もつくらず、注文した人がやかましくいうのでや々と作つたが、名を書き込んでもらった人が点が一つ多いので何故かと問えば「長いあいだ待たしたのでおまけに点を一つそえとったんだ」といったという笑話も残っています。

芦屋の方言

芦屋 べん

芦屋にも、独得な方言や言葉のやりとりがあつて面白い。

芦屋独特の年中行事、八朝の節句を話題に、芦屋人に立ち話でもさせたらと仮定して、芦屋べんの一部をひろつてみた。

おうちやー 今日ば なんごとな

なんてあんだ 孫の節句たな

おなごんかー だごびーな

おとこんかー 八朝馬

きてみつつかい みごとはな

ほんなことな ほんなことくさ

ごめんなーっせ 居んなすな

あんだの 云いよんなつたけ 見け来たばい

ほんなー こつちー 来てみなー

ウワー こりやまた どうじゃろか

ようまー こげーも こさえたな

こげーすりゃー たいそー いいけんどなー

あたいがたー 若けーもな とげなこと

何んが何んやら わきやわからん

おーけなとと こめーとと ませてくさ

ちいーと やるわな だごびーな

お宅は 今日ば 何事ですか
何ってあなた 孫の節句ですよ

おなご(女)の子は 阿子嬢

男の子は 八朝馬

来て見て下さい 美事ですよ

本当ですか 本当(な事)ですとも

御免なさいませ 居られますか

あなたが おつしやっていたので 見に来ましたよ

それちゃー こちらへ 来てごらん

ウワー 此れはまた どうしろうか

よくもまー そんなに 作りましたね

こんな風にすれば 大層よいのだけれど

私のうちの 若い者は こんなことは

何が何やら 訳もわかりません

大きなのと 小さいのと 交ぜ合せて

少し あげましょうね 阿子嬢

口 座 の 方 言

あんたんがた 孫じよは おなごやろ
こりゃー それけんど すんまつせん
そげー 此いなっすんな よござすたい
持つて帰いつて 皆んない 見せちゃんな

孫もそろそろ 泣きよろばい
ほな こりゃ えんりよなし もろていくばい

もう帰いんなんな お茶いりよたい

(お茶いりようは、ほんの挨拶に過ぎないのも面白い。)

あなたのおうちの お孫さんは 女でしょう
これは でも 済みません
そう おっしやいますな よう御座居ますよ
持つて帰えつて 皆なに 見せてやつて下さい

孫もそろそろ 泣いていることでしょう
それでは これを 遠慮無しに 貰つて行きますよ

もう帰えられますか お茶でも入れますのに

(標準語)

いらっしやい

(方言)

き

きな

きない

きてん

きてみ

きてんな

こんな

こんね

くれない

くれー

ください

くんない

つか

つかい

つかさつせ

つかつせ

やんな

やんない

やんなつせ

ないばい

ねえばい

※いらっしやいませんか
ください

ありません(ない)

ありません(ない)

ないばな

しましう(せよ)

してみー

※ありません(ない)とも

ねえとばな
なくさ

します

してみな
してん

※ありますか

ねえくさ
あるか

※しますが
している

すらい
すらあー

いきます

あるな
あるとか

※しますが
している

するたい
するたな

※いきますとも

いくたい
いくたな
いくばい
いくばな
いくくさ

※しますが
している

するけんど
しよる

かえります

いかになくさ
いにかんなくさ
いにかんなくさ
いにかんなくさ
いにかんなくさ

※しますが
している

しよんなさる
しよんなさる

してはいけない

いぬる
しなんな
しなさんな
しなっすんな
すんな

※しますが
している

しよんなさった
しよんなさった

しましう(せよ)

しー

さよなら
すぐ

なんて
なんや

しー

さよなら
すぐ

なんや
なんな
なんなー
ごめんなっせ
もーし
さいなら
いっけと

ほんとうですか

おそろしい
たたくぞ

かたい
やわらかい

大きい

たくさん

少し

ほんなごと

ほんなごとな

ほんと

ほんとな

ねとろしい

どやすぞ

どやしあぐるぞ

くらわすぞ

くらわすぞ

くらいつくぞ

かてえ

やえー

やーえー

おーけー

ふてー

うんと

うんとこさ

どえれー

どされー

ちーと

ちかっと

ちびっと

ちっぴっと

ちよとつと

ごはん

めし
まま

ごぜん

つけもの

つけもん

こんこん

おかね

せん

その他しまっしょう、しまっせん、せんな(しないか)等
数多くあつて面白い。(芹屋の禁)

は ね そ (県指定無形民俗文化財)

芦屋町の「はねそ」と呼ばれる盆唄・盆踊りは、実に二百年の伝統に生きる古典的なもので、芦屋町独特の郷土芸能である。芦屋の盆踊りはそもそも念仏踊りの跳ね踊る形のものであったことに疑いはなく、「はねそ」はつまり跳ね踊るからきているわけで、「はねすそ」がつまって「はねそ」になったものである。

天明の頃、当時日本、と称された歌舞伎役者尾上三十郎を、わざわざ大阪から招いて約一年の歳月をついやして伝授してもらったので、今日のような優雅で情緒の深いものに仕上げられたのである。「はねそ」は盆踊りとして永く本町に継承された踊りである。

一般の盆踊りの多くは、丸く輪をつくって踊るのであるが、芦屋の「はねそ」は祭壇に向って横に並び、踊り手の人数によって二列・三列となって踊り輪はつくらない。地舞台が踊り手の列をはさんで左右両側の縁台(里人は溜座という)に陣どり、唄い手は番傘をさして置座の前に立ち、三味線と太鼓に合わせて左右交互に掛け合いで一曲づつ唄い、お互に左右相手側と唄を競い合おうのである。

「はねそ」にはチヨイトとかソーレという囃子詞はしらばなしを入れたり、歌のくり返しのところを合唱するつけ手が数人必要で、このつけ手も加わって片方が一つの歌を唄い終ると、相手方が続いで唄い出す。こうして左右が交互に唄い囃すのである。

唄い手は声が散らないように雨傘をさして唄う。雨傘は次の唄い手にバトンされるがこの雨傘は見物人にとって唄い手を知るための目安にもなる。

「はねそ」の唄は只単に盆唄のみにとどまらず、芦屋町民の誇る一種の民謡であり、「はねそ」を唄い「はねそ」を踊るのは芦屋町年中行事の一つとさえされている。

「はねそ」には「はねそ」独特の歌詞はきわめて少なく、他地方の民謡や俗曲から採ったものが多く、また即興的に歌われていたので歌の数は非常に多いが、他の民謡のようにきまった元歌というものが無い。しかし歌舞伎狂言の人物や劇を歌ったものには「はねそ」独特と見られるものが数多く残っている。筆者が壮年のころまで「はねそ」といふ云い方は聞いたことがない。単に「エーヤホーホ」とか「踊り」を見に行こうと言っていた。芦屋と山麓とでは踊り方・歌い方に多少の違いがある。

は ね そ の 唄

唄い手	エーイヤホーホー
つけ手	ヨーイヤサーアアヨーイヤセー
唄い手	エー竹に短冊 たんぱく
つけ手	チヨイト
唄い手	七夕まつり たなばた
つけ手	アソーレー
唄い手	エー思い思いの歌 エーヘエーを書く
つけ手	エーヘエー歌を書く

唄い手・つけ手 エー思い思いの歌 エーへエーを書く

「はねそ」の歌詞として、よく歌われているものを次にあげるが、このうち他の地方に類歌のないものは十あまりで、その他の歌詞はすべていづれかの土地で歌われているものである。

◎芦屋をうたい込んだもの

芦屋千軒 名の出た港

三味や太鼓の 音もする

芦屋山鹿に なせ橋かけぬ

潮が横瀬 橋かけぬ

わたしや芦屋の 荒浜育ち

夢にかようは 浪の音

芦屋よいとこ 一度はおいで

浜の真砂と 磯あそび

古い昔の 伝えによると

芦屋釜なら 太閤さんもつて(うた)

麻木名物 荷物にやならぬ

聞いてお帰えり 蛭子うた

雁木蛭子に 一度はおいで

若い娘が 餅あげる

◎歌舞伎狂言をうたい込んだもの

の谷から 取め落とされて

今じゃ屋島の 壇の浦

わたしや 加古川本蔵の娘

力弥さんとは 二世の縁

深い編笠 梶原源太

すこしやお顔が 見とこざる

窓のかけ橋 矢口の渡し

娘お舟の 打つ太鼓

竹に笛は 奥州仙台伊達家の御紋

中の一羽は 御話ぐるい

静御前が 初音の鼓

打てば出てくる 忠信が

いざり勝五郎 車に乗せて

引けや初花 箱根まで

猪にまたがり 仁田四郎

富士の裾野で とどめさす

関の小万の さしたる柳は

給賜なれども 三百両

関の小万の 結うたる髪は

男泣かせの 投げ島田

◎地名をうたい込んだもの

佐渡と越後の さかいの桜

花は越後で 木(き)は佐渡へ

芝で生まれて 神田で育ち

今じゃ火消しの 継持ち

関にや寝るとも 草津にや寝るな

朝の寝さめに しが(魚類を)かついで(商人)の声

◎ばれ垣(卑猥な歌詞をもつ垣)

娘したがる その親たちは

させてみたがる 親子の花

あいております 遠慮はいらぬ

ひろけてさしたす 蛇の口傘

沖の大船 白渡わける

わたしやあなたの 股わける

いれておくれよ 痒くてならぬ

わたしひとりか 蚊張のそと

ちよいとひろげて つまんで入れて

白い汁だす 腰ぶくろ

まだかまだかと 女房にとえは

女房気をもむ 酒の間

娘われたか われたか娘

娘われたか 桐の下駄

よんべさせたら 今朝までうずく

またとさせまい 膝まくら

から傘の骨の数ほど 馴染みは持てど

ひろげさすのは 主ばかり(主ひとり)

◎其の他のもの

来るか来るかと 浜に出て見れば

浜は松風 音ばかり

竹に短冊 七夕祭り

思い思いの 歌を書く

声が出(ら)んなら 馬の尻(お)ねぶれ

馬の尻から 声(肥)が出る

浅黄帷子 袂にほたる

さぞや心は やさしかる

盆の十五日に 踊り子が揃た

どれが踊り子の かしらやら

踊り踊るなら 品よく踊れ

しなのよい娘を 嫁にとる

紺の前坐色よく染んだか 松葉のちらし

松(待つ)に紺(来ん)とは つるこざる

山寺の鐘の音締も 誰かねば知らぬ

惚れてものろけにや ひた(人)知らぬ

親の意見と なすびの花は

千に一つの あだもない

梅のあるのに 隣(な)の桃に

とまる鶯 義理しらす

秋が来たとして 應ええなくに

何故に紅葉は 色づかぬ

羽織着せかけ これちちの人

忘れしやんすな 蔑入れ

極と極と 両手に持てば

どちら(ら)が姉やら 妹やら

文の上書 薄紙なれど

中にも濃字(窓字)が 書いてある
竹に雀は 伸よいけれど

末はかたきの 餌さしや
裏の小窓から 小逆根なげた

今夜来(れ)んとの 謎かいな
わたしやあなたに ホの字に夕の字

中のしの字が はずかしい
なつた一言 聞いたがもとで

夜な夜な待つぞえ ほととぎす
勤め女と よもぎのかやは

客につられて 夜を更かす
花を一枝 折りかけおいた

おとであの花 咲けばよい
今宵一夜は 思もれば曇れ

晴れて逢われる 身ではなし
浅い川じやと 小棲をからげ

深くなるほど 帯をとく
月夜月夜と わし連れだして

見捨てしやんすな 雨の夜に
咲いた桜に なせ駒つなぐ

駒が勇めば 花が散る
豆の小豆の 小豆の豆の

豆の小豆の あずき豆

井戸の蛙と 誹らばもしれ

花も散りこむ 月もさす
はでな紅葉の くれないよりも

松の緑の ジミがよい
わたしや磯の松 ねむるとすれど

磯の小浪が ゆりおこす
ござれ話ましょ 小松の下で

松の葉のよに こまこまと
道中雲助 花ならつほみ

どこの宿でも 酒(咲け)酒と
桜三月 あやめは五月

咲いて年とる 梅の花
泣くな嘆くな 必ず帰る

桐の小箱に 錦着て
勤め勤めと おなぶりあるな

九州大名 みな勤め
胸に千把の 夢たくとても

煙たたにやか 人知らぬ
さした盃 中みてあがれ

中は鶴亀 五葉の松
竹と松とは 間あるけれど

末は高砂 五葉の松
高い山から 谷底見れば

瓜やなすびの 花ざかり

去年の春まで 唄うた人が

今年や御盃で うたわるゝ

盆の十五日にや 仏さま帰る

秋の彼岸にや 早よござれ

祝いめでたの 若松さまよ

枝も榮える 葉も茂る

各地でうたわれる祝い唄で「めでためでたの」とうたう所もあるが「はねそ」では最後の踊りじまいにこの祝い唄をうたつてのち踊り子の解散をする。

②次にあげる歌は「いれ節」や「字あまり」の歌で「はねそ」の歌に熟練した者でないと、うたいにくゝむずかしい歌でこの箇所は早い調子でうたう。

嵐やレコノドッコイ 沖から吹いて来た

船頭さん出そうじやないか

出すも出さぬも 風次第

江戸で名高い 幡随院長兵衛は

男伊達してわが身を果す

後に残りし子分達は

さぞや仇が 討ちたかる

早野勘平さんな

みの替て笠きて 鉄砲かついで シシ撃ちやご商売

二十九がお厄で 三十が命のおわり

妻のお軽さんな 若後家女

竹に雀は

あちらの屋根から こちらの屋根さえ

チューチューばたばた

羽交えを揃えて 品よくとまる

とめてとまらぬ 窓又は色の道

お婆とこゆきやる ヒューヒューガラガラ

起き上り小法師に 三升樽下げて

嫁の任所に 孫抱きに

大津の鍛冶屋と 草津の鍛冶屋が

トッテンカラリン チンカラリンと

叩きのべたる 唐金の擬宝珠

水にうつるが 瀬田の橋（又は膳所の城）

こっちの濠り戸は くぐりにくいくぐり戸

二三度くぐつたら くぐり溜うた

竹の丸木橋や すべつてころんで 危ないけれども

様となりや渡る

落つりやもろとも 二人づれ

竹の切り株に スコタンコタンと

タンタン溜りし水は

澄まず濁らず 出ず入らず

よんべ来たのは

姐さん猫ちゃと おっしやいますけど

猫が下駄を 履くものか

◎下者が古老から聞いたもの

箱根八里は 馬でも越すが

越すに越されぬ 大井川

すり鉢を 伏せて跳めりや三国一の

味噌を駿河の 富士の山

富士の裾野に 西行さんが屋敷

歌を枕に 田子の浦

小倉おばさんから 赤いへこ賢た

雨も降らんのに 尻からげ

娘十七八は 波止場の舟よ

早く乗らなきや 人が乗る

一階貸します お望みならば

下も貸します 後家じゃもの

正津ヶ浜「はねそ」と「思案橋」の歌詞

◎地名をつたい込んだもの

関で女郎買うて うちのかか見れば

三里奥山 古だぬき

関で女郎買うて 田の浦沖で

いかり下して 胸算用

関の女郎衆は 親切ものよ

雨の降らぬに 傘を貸す

関の女郎衆は 医者よりこわい

絹の財布の 脈をとる

関の女郎衆は 狐か狸

わしも二三度 だまされた

関(有名な刃物の産地)の小刀 身は細けれど

切れて想いは 深こさる

関の先帝 小倉の祇園

雨が降らなきや 金が降る

関の先帝さん 参りとはないが

女郎を見たさに 二度まいる

関へ行くなら 雪駄をはきやれ

関の切り石や すべります

関はよいとこ 大里を前に

可愛い小倉は 松の影

かたい約束 石山寺の

石の証文 岩に本

◎その他のもの

一つ出しましよか はばかりながら

関の文句は 知らねども

うたえうたえと 急ぎ立てられて

涙は出らずに 汗が出た

わたしゃ好好き うたわにやならぬ

関でこの身を 果すとも

関の上手は 山崎さんさ

それについでが わしが妻

三ざうたえば 空飛ぶ鳥も

つばさ休めて 唄をきく

唄をうたうなら キリキリシャンと

シャンとうたわにや つけられぬ

鐘と瘤目と 流れて下る

どうせこの川 後生の川

後生の川とて すまないけれど

昔六部は 身を流す

昔六部は 身を授け島田

どこの島田が とめたやら

どこの島田が とめよがまゝよ

かたい約束 しておらぬ

盆が来たばな 傘買うておくれ

日傘雨傘 しのび傘

傘をもるたが 柄のない傘を

さゝぬさゝれぬ しのび傘

傘をわすれた 峠の茶屋に

空が曇れば 思い出す

姉がさすなら 妹もさしやれ

同じ蛇の目の から傘を

松が茂って お庭がくらい

下るせ小松の 一の枝

一の枝より 二の枝よりも

三の小枝が 影をさす

様は才取りさし わしや軒雀

さしすさゝれつ 面白い

冴い山から 谷底見れば

可愛い殿こが 水まわり

去年盆まで 踊りし様が

今年しや未来で 水まつり

傘を手に持ち どなたもさらば

ながのお世話に なりました

梅のあるのに 隣の歌へ

とまる鶯 義理しらす

義理につまれば 鶯さえも

梅をはなれて 藪でなく

こゝの山の中 かたいし(椿の実)どころ

油しめ木の 音がする

油しめ木の 音ならよいが

継子いじめの 音がする

肥えてござるよ 十五夜さまは

それもそのはず 病み(暗み)がない

やせてござるよ 三日月さまは

それもその筈 病みあがり

唄はうたいたし 唄の字は知らぬ

人根畑の くれがえし

(筑前芦屋の盆踊り「はねそ」)

参 考 資 料

遠賀郡誌(下巻)

能美 安男

遠賀郡誌復刊々行会

芦屋町誌

芦屋町誌編集委員会

芦屋町役場

若松市史(全)

若松市役所

八幡市史

八幡市役所

岡

岡編集委員会

芦屋町郷土史研究会

芦屋の葉

瀬井 明生

芦屋町観光協会

広報「あじや」

芦屋町役場総務課

芦屋町役場

ガイドブック「芦屋」

岬 茫洋

芦屋町産業観光課

瑜珈神社出来記

田中 紅夢

瑜珈神社奉賛会

年間行事予定表

加藤 芳人

北九州史跡同好会

岩崎天外談話録音テープ

瀬戸 正廣

芦屋昔話座談会

芦屋の昔の風景「板画」

小川 健次郎

芦屋町教育委員会

筑前芦屋の盆踊り「はねぞ」

野間 栄

芦屋町教育委員会

西日本新聞

西日本新聞社

日本歴史大辞典

日本歴史大辞典編集委員会

河出書房

大日本百科事典

相賀 徹夫

小学館

石造物の調査を続けながら次々と廻っているうちに、其の位置が最初に設置された場所より、他所に変わったものが数多いのに驚いた。皆それぞれわけあつての事とは思ふが、元の場所に在つてこそ意義があり、これを造り建てた人々の善意の表われに意義があると思う。篠田彦大神の碑、つにしても、どうしてこの位置に建てられたのか、誰が発願して此所に建てたのか、元の場所にあつてこそ建てたものに意義があると思う。元の場所に在つてこそ建てた古事来歴が生き、これを建てた人の善意が生きると思う。

又、石造物を調べて廻っているうちに折角刻み込である文字が、風雨のために見にくくなっているものも相當に数多くあるのに気がついた。中には石質が悪いために表面が剥落したもの、一部が缺けて文字がわからなくなったもの、草藪の中に倒れてしまつて、そのうちには廃棄されるのではないかと思われるもの等々調査にかゝつていて良かったとつくづく感じた。

この書の内容に不足している所、筆者が見落して記載漏れの所、こういう事を知っている、後世の人のために記載して残しておいて欲しいと思ふ事、またこの書の中に不密な点がある、訂正しなければならぬ所も多々あると思います。読者諸兄の御教示と御指導をお願いする次第です。再発行する場合に参考にし、挿入したいと思ひます。活字の持ち合せの無いところは当用漢字を使用し、人名は敬称を略させて頂きました。鹿児島本線・筑豊本線を利用し、町外遠方より「筑前芦屋旧跡めぐり」一探訪に来られる方は折尾駅下車、降車口左そばの北九州市営バスにて、芦屋線栗屋行に乗車、栗屋終点が巡路の始りです。大城行に乗ると一停留所区間栗屋まで坂道を歩くことになります。

町内を一日で主要箇所だけ廻りたい方は、西鉄バス(停留所は駅前より国道まで少し歩く)で来られる方は、西鉄バス停庄門通りで降り、北九州市営バスで来られる方は自衛隊前で降り、岡發神社を振り出しに廻られるとよいと思います。ちなみに山鹿のみを探訪される方は、北九州市営バスにて山鹿バス停で降車すること。当日は方向を見る磁石をお持ちになると、案内図を見るとき便利です。



芦屋町郷土史研究会々員
芦屋町先賢顕彰会々員
北九州史跡同好会々員

老筆の當時掘発群墓中山城

筑前芦屋旧跡めぐり(石造物を訪ねて)

昭和五十七年十二月一日発行

編集兼 福岡県遠賀郡芦屋町山鹿(元町)一三十一番地
発行所 桑 清

筑前

芦屋山内記

附 筑前芦屋旧跡めぐり

昭和六十年四月三日発行

発行所 千八〇七一〇一

福岡県遠賀郡芦屋町山鹿(元町)一三十一番地

山鹿はた資料室

電話〇九三一二二二二・一七六

郵便振替口座 福岡八一四〇八

(定価一五〇〇円)

明治三十四年十一月發行

八幡繁昌記 著者 荒巻 次郎

残部在庫あり
頒価 一〇〇〇円

複刻版 発行者 榮 清

発行所 山鹿はた資料室

(内容) 附記目次

八幡繁昌記目次 特別家屋税戸別割の賦課率(明治四十年七月議)

沿革 八幡町現行諸規定抜萃(明治四十年七月議)

特別家屋税特別戸別割地位の等級

町立小学校生徒授業料

町名講書

八幡町給與規定

八幡町職員録抜萃(大正三年九月議)

市制施行ノ議ニ付意見答申(大正五年十二月)

市制施行ニ伴フ町有財産処分ノ件ニ付答申(大正五年十二月)

懐かしい八幡の写真(二十八枚)

字枝光 八幡製鉄所草創のころ……………加藤 芳人

字大蔵 八幡村九十周年……………小川 久雄

製鉄所一般 起業祭よいつまでも……………岩見 隆雄

道案内 七十七年の「鉄の歴史」秘めて……………西日本新聞

燃える溶鉱炉……………西日本新聞

八幡市旧蹟めぐり……………上野 例蔵